



今矢賢一(いまや けんいち)

14歳のとき家族で渡豪、ニューサウス・ウェールズ大学卒。1999年に帰国。2000年にネットベンチャー企業を立ち上げ、2002年バリューコマース傘下。2004年社内プロジェクトとして「BLUETAGプロジェクト」を発足。2007年、BLUETAG株式会社設立。代表取締役就任。32歳。

あるにもかかわらず、遠征費は自腹。家族や親せきに頼ったり、自らスポンサー探しに歩いたり。日本はこんなに豊かな国であるのに、一部を除いたアスリートには練習に集中できる競技環境もない、遠征費も出ない……ぼくはこの現実を知り、とても驚きました。

福西 政府からの補助が少ないということでしょうか。

今矢 先進国では、スポーツ省やスポーツ庁があり、国家予算措置も厚く、スポーツ政策が充実しています。ですが日本では、たとえばオリンピック選手は文部科学省、パラリンピ

ック選手は厚生労働省と、管轄する省庁もバラバラ。唯一、独立行政法人日本スポーツ振興センターが「スポーツ振興基金」で選手を助成しています。助成金は「エリートA」の選手で月額二〇万円、「エリートB」の選手は月額一〇万円です。フルタイムで練習し、競技道具を買い、遠征する……といった活動をするためには、到底それだけでは足りません。

多くのアスリートは企業の協賛に頼っているのが現状ですが、正直、これもメジャーなスポーツでの有力選手でないと、難しい。マイナーな

スポーツの選手は、たとえ一流であっても、世界を目指せないということ。日本のスポーツは「体育」の延長で、「文化」ではないんだと強く思いました。

福西 それを、インターネットを活用してなんとかできないか、と考えたわけですね。

今矢 日本の優れたアスリートたちを、大企業の協賛だけに頼るのではなく、個の力・個の集結によって応援することができないか、インターネットという社会インフラを駆使して、マイナーだけれども、世界を目指す一流の選手たちを知ってもらおう。一〇〇万円協賛してくれる企業を二社見つけるより、一〇〇円応援してくれる個人を一万人数めたい。それがBLUETAGの原点です。

「サポート」の仕組み作り

福西 アスリートのみならずにとっても、心強い仕組みといえますね。具体的にはどんな取り組みをしているのでしょうか。

今矢 個人の支援としては、インターネットの「BLUETAG.JP」で協賛企業のスポーツ関連商品を購入していただく、その販売収入の五パーセントがBLUETAG認定アスリート、またはスポーツ振興基金に寄付される仕組みになっていま

す。特長は、購入者自身が、支援したいアスリートを選ぶことができること。従来の寄付は、支援実態がわかりづらいという難点がありました。BLUETAGは、アスリートに直接、支援の意思が伝わるという仕組みを作りました。

福西 法人サポート会員も増えていきますね。

今矢 現在は三〇社ほどですが、「世界を目指すアスリートを応援している」という企業姿勢が、社内のモチベーションを高めることにつながると好評を得ています。新しいマーケティングや社会貢献活動の場にもなっていると評価されています。うれしいことです。

仮にある企業が毎月五万円の利益があり年間六〇万円の利益を出しているなら、法人税率が四〇パーセントですから二四万円の税金を納めることになりま

す。そのうち、スポーツ支援に活用される金額は、〇・八四パーセント。たったの約二〇〇〇円なんです。もちろん、税金を納めるなどしているわけではありませ

ません(笑)。しかし、スポーツを応援したい気持ちを持ってくださっているなら、直接支援していただくほうがずっと効果的なんです。また、ぼくたちはその支援を「継続」していただくことが、とても重要だと思っています。ですから、法